

## 行學之二道

猪口 海靜

行學の二道は世出世を問はず人間として世の中に處する以上は鳥の兩翼の如く車の兩輪の如く二者相俟つて行かざるべからざる軌道なり、行學とは行は即ち實踐的修行、學は即ち理論上の研究なり、若し人にして此の一を欲かんか誠に迷路を辿るが如き危険に遭遇せん、如何に博學多識の者と雖も之を實行せざるに於ては社會の爲め何んの益する所あらん獨り社會のみならず自己としての責任を完ふること出來得べからざるなり、譬ば眼ありて足なきが如し遂に其の眼の何等功を爲さずして終らんのみ博學多識にして實踐の無き者は恰も如斯ものにして一生空しく功を奏することなく終りぬべし、所謂『文字の人は無行より出づ』との嘲りを免かれざるなり又是れに反して無學の者は恰も暗に燈なくして進行するが如く又幼子に銳刀を與へしが如し凡ての行ふこと軌道を誤り易く危険此の上も無きことなり、されば學は眼の能く物を視て善惡邪正美醜の差を識別するが

如く行は眼の見たる所に隨つて足を運ぶが如し、若し行ありて學なくば則ち暗く足ありて眼無きが如し學ありて行なくば則ち危く眼ありて足無きが如し、若し如斯人あらんか开は真正なる人格を具へし人と云ふを得べからず、行學の二道相俟つて始めて『智目行足到清涼地』の言を欺かざるべし、此に於てか行學の相資ふの必要を肝に銘すべきなり、之を吾等宗教家としての人格聖祖門下としての人格を具へむとするに於ては一層行學の二道を完成すべからざるなり、宗祖は『行學絶へなば佛法あるべからず』とまで極言せられしは之れなり、然るに此の行學の二道を完全に勵むことは世間の輕薄者流の當底得べからざることなり、所謂宗祖の『行學は信心より起るべく候』と教へられし如く此の二道は信仰を以て其の根本基礎と爲すが故なり、何んとなれば信仰は最も健全なる行學の原動力並に歸着點として實に二道の始終を一貫する生命なればなり、若し信仰を度外視せんか何づれの日ありてか豈に能く自行を成就し往ては化他を満足することを得べけんや修むべきは行學の二道なり。

今や宗門に學者としし信仰の道を説くもの尠ながら辯説巧妙にして佛陀の四辯八音もかくやと疑はるが如き能説者ありと雖も其の能説の人自身は果して如斯信仰を有して居るや否や彼等の日常生活如何は頗る疑問なり、又疑ふも敢て僻見にあらざるべし嘗て宗門近代の中興新居薩師は宗勢を憂ひて親鸞死して百の親鸞あり日蓮死して一人の日蓮無しと言はれし事あり假使宗祖の御力の萬分の一なりと雖も一度門下に連る上は二陣三陣續くべしの御言ばに悖らず常に聖訓を奉じて肝銘しなば真正なる本化の門下として恥ざる人格を具へ得べきなり、机の上の一念三千論も哲學も大いに大切のことなり、されど其の學びし學門も研きし智慧も他日社會に立ちて其の得たる智識を活用すべきを謬らざるべからず、徒らに遊戯雜談にのみ明し暮す者あらば畜同者の誹りを免れざるなり、總じて予が弟子等は我が如き正理を修行し給へ智者學匠の身となりて地獄に墮ちて何の詮か有る可き乎の鐵言今尙は鏘々として耳を貫くを覺ゆべし眞に味ふべき金言ならずや、嗚呼勵むべきは行學の二道なり。

## 古りたる杉

今村 野風

薄暗い、森のしげみに、しめなわを廻した二本の年老た杉がある。日の光りは、窺くように、老杉の面を照した。四方の草や、木は、其の暖かを吸集するに忙しかつた。じめじめとした所から、灰色の陽光が、あがつて、軽い空氣と互に融け合つて美しい愛情を交換して居る。

けれど、此の様な時間は、長くは續けられない。一時間……、二時間……太陽が、南に廻つた時ばかりである。やがて日の光は、薄らいで、冷たい淋しい、昔に歸る。霧の深い此の山の草木は、日の光を充分に浴する事が少ない。

風が霧をまいて、山から山を呑んで、龍となり虎となつて、荒みに、すさんで、この狭い天地を鎖して、木々の幹や、枝や葉を、吹いて、無限から無限へ荒んで行く。杉の片側は、たどれたように赤くな